

『ドビュッシー：大作曲家の最晩年の作品群』

伊藤美由紀（2400文字）

1918年、直腸癌で55歳の短い音楽人生の生涯を閉じたドビュッシーの晩年の作品に焦点をあてて、彼の音楽に対する想いを探してみたい。

ドビュッシーの唯一のオペラ作品《ペレアスとメリザンド》(1893-1902)以来、劇音楽として実現した作品に、49歳の時の《聖セバスチアンの殉教》(1911)がある。イタリアの詩人ガブリエル・ダヌンツィオの台本による4時間におよぶ5幕から成る神秘劇に、ドビュッシーが1時間ほどの付随音楽を書いたものである。契約時には、まだ詩は完成しておらず、普通ならば1年はかかるであろう総譜を、2ヶ月で書き上げるために、弟子であり作曲家のアンドレ・キャプレの援助を得て仕上げる。初演の後、この作品をオペラに改作しようと考えて、台本に手を加える許可を詩人から既に得ていたものの、残念ながら実現せずに終わってしまった。異教的な要素を思わせる神秘的で色彩豊かな和声による作品で、今日では、音楽部分のみ抜粋して演奏される事が多い。

次に書かれた最後の管弦楽となるバレエ音楽《遊戯》(1912-13)では、それまでに培った彼独自の音楽語法を駆使した作品である。4管編成の重厚な音響で、絶えず流動する色彩感に満ちた作品となっている。当時、パリでは、ディアギレフ率いるロシアバレエ団が活躍し、ドビュッシーをはじめ、ラヴェル、ストラヴィンスキー、サティ、ミヨーらの作曲家達は、バレエ音楽の作曲依頼に応じていた。ドビュッシーの《牧神の午後への前奏曲》、バレエ音楽《カンマ》、《遊戯》もこのバレエ団によって上演されている。

1914年、ドビュッシーは、第一次世界大戦勃発にかなりの衝撃を受け、暫くの間、作曲を続けられずにいた。その後、『攻撃された美を少しでも再建するために-』と、精力的に曲を書き始める。1915年から亡くなる前年の1917年までに、《チェロとピアノのためのソナタ》、《フルート、ヴィオラ、ハープのためのソナタ》、《白と黒で》、《12の練習曲》、《もう家のない子供達の降誕祭》、《ヴァイオリンとピアノのためのソナタ》の6作品を完成する。

最初にピアノ作品について述べる。作曲活動に復帰した第1作目の2台ピアノのための《白と黒で》は、3曲から成る。1曲目は、冒頭のは長調の軽快で浮遊するような動きの主和音にはじまる。この音形は、作品中、何度も繰り返され音色が変容されていく。2曲目は、冒頭にフランソワ・ヴィヨンからの引

用で、『フランスの敵に対して訴えるバラード』と書かれており、ドビュッシーの知り合いでありドイツ軍に殺された中尉に捧げられている。戦争への憤り、フランスへの愛国心などが感じられる作品である。3曲目は、ストラヴィンスキーに捧げられており、ドビュッシーが度々自作に使用する諧謔的な独特な音形など、躍動的な作品となっている。全曲を通して、舞曲風な部分、マーチ風な部分を含み、祖国フランスへの重苦しい戦いへの想いが所々に感じられる。

《12の練習曲》は、全12曲2巻からなるピアノ練習曲で、ショパンに献呈されている。彼の尊敬するショパンかクープランのどちらに献呈しようか悩んだ後、当時、デュラン出版社から依頼されていたショパン全集の楽譜を校訂する仕事を引き受けていたことも重なり、ショパンを選ぶ。ショパンの練習曲を超える高度なテクニックと芸術性を必要とする、ドビュッシーのピアノ作品の集大成とも言えるだろう。彼は、練習曲にピアノ技法の特殊な課題を割り当てている。第1巻は、〈5指のため〉、〈3度のため〉、〈4度のため〉、〈6度のため〉、〈8度のため〉、〈8指のため〉の練習曲となっており、指のメカニズムを対象としている。第2巻は、〈半音階的な音程のため〉、〈装飾音のため〉、〈反復音のため〉、〈対比的な音響のため〉、〈組み合わされた分散和音のため〉、〈和音のため〉といった、音響と音色に焦点をあてている。特に第10番の〈対比的な音響のため〉では、音域、テンポが流動的に動き、P, PPの静寂なテクスチャーのなか、微妙な音響の変容を楽しむ作品である。ドビュッシーは、楽器の可能性を熟知し、ペダルの扱い方が巧みであり、音色の混ぜ合わせ方は、本人が試行した結果である。軽やかさ、音色の複雑な多層性は、独自の音響世界を生み出す。ピアニストである作曲家の、ピアノへの執着心、可能性への探求が、結集された作品集である。

1915年夏に、純粋な伝統的な形式に戻ることを決断し、『様々な楽器の為の6曲のソナタ』を書くことを計画する。ドイツの伝統的なソナタ形式で書くことはせず、クープラン、ラモアの時代のフランス17、18世紀の古典的組曲である自由なソナタを想定して作曲する。デュラン出版社の楽譜の表紙には、「クロード・ドビュッシー、フランスの音楽家」と、わざと強調してサインがしてある。ドイツに対する愛国主義的抵抗と、強い意気込みが感じられたものの、病気のために3曲にとどまってしまう。4曲目《オーボエ、ホルン、クラヴサン》、5曲目《トランペット、クラリネット、ファゴット、ピアノ》、6曲目《コントラバスを含むいくつかの楽器》という意欲的なアイデアは実現できなかった。1

曲目《チェロとピアノのためのソナタ》、2曲目《フルート、ヴィオラとハープのためのソナタ》を完成後、直腸癌と診断されたのである。最後のソナタ《ヴァイオリンとピアノのためのソナタ》の自筆稿に、作曲者の筆跡で『4番目は、オーボエ、ホルン、クラヴサンのために書くつもり』と書き込みがある。終楽章は、自分の想いを音で表現できるまでに、何度も改訂をし直している。スペイン風な音色の散りばめられた最後のソナタは、ドビュッシー本人のピアノにより初演されたものの、パリでの告別演奏となる。その後、病气悪化のために郊外に転地するものの、戦争の爆撃音を聞きながら日に日に衰弱し、1918.3.25に亡くなる。最後まで音楽の可能性を諦めず、新たな音色への挑戦を試みた作曲家である。